

# 深沢中学校 令和6年度学校関係者評価会報告書

## 【学校関係者評価アンケートの分析】

### 〔1〕 始めに

令和 6 年度の学校関係者評価アンケートの回収率は、保護者 79.1%、生徒 73.3%、地域の方 58%であった。保護者と地域の方は概ね昨年度なみであるが、生徒は昨年度の 83.2%から 10 ポイント近い減少となり、総数の 3/4 からしか回答を得られていない。

次に集計結果についてであるが、令和 5 年度との比較で特に著しいのが生徒のアンケート結果における肯定的評価が減少している項目の増加である。数値的にも『4 キャリア教育について』や『6 学校全般について』の肯定的評価が 70%を割り込んでいる項目がある。

これらを踏まえた上で、詳細な分析と評価を行ってまいりたい。

### 〔2〕 保護者アンケートから

#### 1 学習指導について

(1)～(4)までの肯定的評価は全て 85%を超えており、概ね満足していると推察される。しかし(1)に関しては令和 5 年度から－6 ポイントとなっていることについては検証が必要であると考え。また、分からないという回答が(2)では 35%、(4)では 20%となっている。これは全ての授業の参観をしない限り答えようがなく、この内容を保護者に問うのは無理があるのではないだろうか。また、生徒向けのアンケートには『(5) 先生は、提出物やテストなどを分かりやすく評価している。』という項目があるが、保護者向けにはない。しかし、生徒の提出物やテストに対する評価自体は保護者の目に触れる機会もあるので、上記(2)や(4)よりはむしろこの設問の方が、保護者でも回答できる内容であるし重要であると考え。

#### 2 生活指導について

肯定的評価は 80%を超えており、概ね満足していると推察される。しかしここでも(1)については前年比－6.5%となっており、注意が必要である。

#### 3 学校行事について

(1)(2)の結果から、保護者は学校行事に関心が高く、実感を持って評価していると思われる。一方で、(3)についての肯定的評価が前年比－6.2%で、否定的評価と「分からない」の合計が 20%強となっている。『子どもの意欲を大切にしている』という点についての検証が必要である。

#### 4 キャリア教育について

3 項目全てについて、分からないという回答が 20%を超えており、特に(3)については否定的評価が約 18%、分からないが 31%と、全体の半数近くを占めている。保護者に対するキャリア教育に関する説明(意義や目的、具体的なプログラムの内容、3 年間の段階的な目標とその取り組み)に、1 年時からしっかりと取り組む必要があると考える。

## 5 教職員について

(1)についての肯定的評価が-4.7%、(2)の否定的評価が約 20%であることは、看過できない状況である。教員個々の努力と同時に、教員間相互でも生徒や保護者との関係性の構築についての検討を行う機会などを増やしていくべきではないかと考える。

## 6 学校全般について

肯定的評価が(3)と(4)を除き 85%以上であり、特に(5)については 95%近くになっており、保護者は生徒たちが充実した学校生活を送っていると捉えていると推察される。

(3)の e ラーニングについては、学習の捉え方が生徒と保護者で認識にズレがある可能性もあり、適宜学校からの説明や情報共有が必要であると考え。また「学び舎」「学校間の連携」に関しては、体験しない限り実感できるものではないと思われるので、このことに対する保護者の意識を高めなければならないのであれば、具体的な体験の機会を増やすしかないと思われる。

## 7 部活動について

部活動に対して保護者の評価は概ね肯定的である。特に 1 年生の保護者にとって部活動は印象が強く生徒の様子や変化を見て取れる機会となっているのではないかと推察される。一方で委員会の中では、この設問自体、部活動が行われていることを前提にしたものであり、部活動が行われないことが否定的に扱われる危惧があるという意見があり、今まで気づかなかった視点として今後の検討に値すると考える。

## 8 学校からの情報提供について

(3)以外は肯定的評価が 90%を超えており、学校からの情報提供(広報)について保護者は満足していると推察される。「学び舎」については、「分からない」の割合が多いものの、「学校全般について」の「学び舎」項目と比較して、それほど評価は低くない。体験的実感はないが、情報としてはある程度認識されているとみることができる。

## 9 学校運営について

全ての項目について肯定的評価が約 84%となっており、保護者の理解は一定程度得られていると推察される。しかし(2)について前年比-5.7%となっており、さらに「分からない」という回答が 20%である。学校運営の根幹である教員の教育活動についての評価であり、検証が必要であると考え。また(1)に関しては、後述の『10 の(3)』の結果と矛盾が生じており、こちらも検証が必要である。

## 10 家庭と学校との連携について

全ての項目において、他と比べて極端に肯定的評価が低くなっているが、共働き世帯が半数以上となっている現状においては、否定的=関心がない、とはならないので、(1)(2)については数値の改善を図ることはあまり意識しなくてもよいと考える。先述したように

(3) については、9の(1)の結果と矛盾が生じており、『重点を伝える』ことと『重点を理解する』との差異についての検証が必要である。

## 11 地域との連携について

いずれの項目も否定的評価は低いものの、「分からない」が割合として多い。これも、保護者にとって学校と地域の連携が「見えていない」、あるいは「見ない」という状況であることが推察される。しかしながら、(2)の結果から一定数は学校の地域への協力的な姿勢を評価していることは見て取れる。

## 12 学校の安全性について

学校の安全性に対する評価は概ね肯定的である。しかし(3)に関して分からないという回答が20%もあり、実際に災害が発出した際に不安が残るので、学校側からのさらなる情報共有・情報提供が求められると考える。

## 13 独自項目

独自項目において、(6)の時間に関しては、生徒に比べて相対的に保護者の評価が厳しくなることは想像ができ、事実生徒の回答は肯定的評価が高くなっている。この点に関しては、保護者が見ているのは家庭での姿であり、生徒は学校での姿を意識している可能性もあるとの指摘が委員会の席上でもあった。問題は(2)についてであり、20%以上の保護者が否定的評価を行っている。何をもって「夢」とするのかは、保護者と生徒の世代の違いによる意識の差が現れたものかもしれないが、保護者の否定的な見方は生徒にも影響を及ぼすことは十分に考えられるので、先のキャリア教育への理解も含めて、学校側から保護者へ、生徒についての肯定的評価の積極的な発信も必要なのではないかと考える。

## [3] 生徒のアンケートから

### 1 学習指導について

生徒の授業に対する満足度、肯定的評価は全般的に高いが、総じて肯定的評価が前年比から減少していることが気がりである。特に(5)については、約1/4の生徒が否定的評価を行っている。『分かりやすい評価』という言葉そのものが主観的であるが、例えば提出物やテストなどの結果に対する個々のフィードバックを少し丁寧に行うなどの方策を取ることで改善に繋がる可能性があるかもしれない。

### 2 生活指導について

学校での集団生活、ルール・規律に対する生徒自身の自己評価(1)は非常に高い。(2)(3)も肯定的評価が約8割で、十分高い評価と見ることができるが、(1)と(2)(3)の差について考察すると、先生と生徒の集団生活の在り方、ルールの順守に対する意識のギャップも(当然ながら)存在しているのではないかと。学校生活をテーマに話し合う機会を増やすことで、生徒たちの社会性、他者を認識する力が向上することにつながるかもしれない。また(2)(3)についての肯定的評価の減少も気になるところである。

### 3 学校行事について

いずれの項目も肯定的評価が高く、生徒たちにとって学校行事が充実感をもたらしていることが推察される。しかし(3)については保護者の評価での数値が低く、生徒においても前年比マイナスとなっている。『生徒の意欲』について教員と生徒の間の意思疎通の重要性について検討していただきたい。

### 4 キャリア教育について

委員会の席上で、キャリアパスポートと学校独自のシステムとの重複が原因で否定的評価の増加している可能性の説明をいただいたが、それ以外にもそもそものキャリア教育についての生徒の理解不足も重なっていることが、この結果に繋がっていると考ええる。保護者同様、キャリア教育の重要性についての意識付けを、1年時の段階から繰り返し行う必要があると考える。

### 5 教職員について

(2)の相談のしやすさについては6割程度の肯定的評価にとどまっており、前年比-8.7%と大きく減少している。保護者からの評価も低かった項目である。今まで以上に、教員側から積極的な相談のしやすい環境作りに努めていただきたい。

### 6 学校全般について

程度の差はあるが、全ての項目で肯定的評価が前年比マイナスとなっていることが少し気がかりである。その中で(1)について9割近い生徒が肯定的評価を行っていることは安心材料である。(3)の項目について大幅に数値が下がっているがeラーニングはそのものがあまり行われなくなったことが原因と考えられる。5)の結果は、体験者が一部の生徒に限られているためとも考えられる。(6)については、体育系の部活動を行っている生徒と、そうでない生徒によって差が出ると考えられるが、一方で心身の健康についての意識付けを行う教育は重要であり、その取り組みによって数値の改善の余地はあると考える。

### 7 部活動について

両項目とも85%以上の肯定的評価を得ていて、そのこと自体は喜ばしいことではあるが、保護者のところで指摘したように、部活動が行われることが前提の設問については、今後検討の余地があると考ええる。

### 8 独自項目

全般にわたって肯定的評価が高い。(1)については中学生期ならではの不安定な自己肯定感のために肯定的評価は他の項目に比べてやや低めである。一步一步、自己肯定感、自尊感情が備わっていくよう、成長の途上にある生徒たちを見守ってあげたい。一方で学校生活における友達(学友)との活動が楽しい、自分の住んでいる地域への好感度が高いことは、発展途上の自己肯定感を補って余りあるものとなるだろう。(4)(5)も対人関係、社会性

を育む心の苗床として大切であると考える。(6)に対する自己認識の肯定的評価は高いが、この内容も他者との関係性の中で捉えることを学び取ってほしい。

#### [4] 地域の方のアンケートから

##### 1 生活指導について

生活指導に対する肯定的評価は高く、安定している。

##### 2 学校行事について

いずれの項目においても肯定的評価が高い。

##### 3 学校からの情報提供について

このアンケートに回答いただいている地域の方々は、そもそも学校との関わりが多く情報提供を受ける機会も多いと推察される。その意味で文書などで直接届く情報が想定される(1)(2)評価が高いのは当然の結果と言えるが、(3)(4)のように自らが行動を起こす必要がある部分については、積極的に行っていないことが、この結果に繋がっていると思われる。。

##### 4 学校運営について

学校の重点目標、学校の対応に対しての肯定的評価は高い。(2)の項目については、具体的なやり取りをしていない場合答えようがなく、その分、肯定的評価の割合は下がると思われる。

##### 5 地域との連携について

地域の人や施設の活用、教育活動は実体の伴うものであり、関係者は評価もしやすいが、会合の出席を中心とする(2)(3)の項目内容は、関係者以外、情報面での接点が薄く、「わからない」と答えるしかないということになるのではないか。学校運営委員会については、同委員会の存在意義と委員会の開催回数が多いこと、フォーラムなどの活動を独自に行っているなどの点で、もっと活動の結果や成果が周知されるようにしてもよいと考える。

##### 6 学校の安全性について

学校の安全性は地域のかたがたにとっても関心度の高い項目である。アンケート結果を見てもそのことが顕著である。

#### 【学校自己評価の分析】

令和6年度の学校自己評価アンケートの回答者数が18名であったが、この数字は教職員全体の何%に相当するのか、回答者が少ないのではないかという疑問が複数の委員から寄せられた。また、提供された資料がPDFで一部改善案などの自由記述が読めない部分があったこと、応答数そのものも少ないことも気になる部分である。

分析に入る前にまず総論として、殆どのジャンルの項目について肯定的な評価が大半を占

めており、これは生徒や保護者に対する責務を果たすという、学校長を始めとした教職員の方々の自負と責任感の現れと捉えたい。その上でさらなる高みを求めてという学校関係者委員会の総意として以下に幾つかの指摘をさせていただく。

限られた情報量の中で正確な分析というよりは感想の羅列になってしまうが、何らかの参考の一助としていただきたい。

- ・ 毎年のことであるが、そんなに大きくない組織の中で、専門的な知識などを問われていない設問に対し「分からない」という回答が何故生じるのか疑問である。例えば『少人数授業（数学・英語）の成果が見られている。』『教職員の情報共有が適切になされている。』などである。これは正に設問にある情報共有の意識を持つことで解決できることである。
- ・ 『各教科等の年間授業時数は確保されている。』『無理なく計画的に学校行事が実施されている。』に否定的回答が一定数ある。また、【部活動】に対しての改善案に 60%が「負担」という回答を行っている。学校関係者評価アンケートでも触れたが、部活動や行事が盛ん＝善という、何となく定着していた考えをいったん見つめ直すことも必要かもしれない。
- ・ 『学校のきまりや基本的な生活のルールが教職員で共通理解されている。』『いじめの予防や早期対応、解決に向けた対応ができている。』『不登校の未然防止や多様な学びの機会を提供できている。』について否定的意見がある状態は、理由の如何を問わず問題である。これらは先述した情報共有の促進により解決できるのではないかと考える。
- ・ 上記情報共有の一環である筈の『校内研究・校内研修が充実し、日々の実践に役立っている。』に否定的意見があることも注意すべき点であると考え。
- ・ 『教科日本語』については毎年一定数の否定的評価が存在しており、この教科の存在意義も含めて、機会があるのであれば、何か区に対しての提言・提案をしていただきたい。
- ・ 『図書館を授業で有効に活用している。』の評価が低い、GIGA スクール構想が推進される中で、改めて紙の本や資料の重要性も指摘されており、意識的に図書館を活用する方策を練る必要があるのではないかと考える。

令和 7 年 3 月 31 日

令和 6 年度学校関係者評価委員会

委員長 井坂 聡

委員 青柳 義博／菅田 輝代志／谷岡 美貴

外館 孝則／西川 雅子